

弘徳寺親鸞聖人坐像(88歳寿像)と「袈裟掛けの松」の切り株

本願寺派 神奈川県厚木市飯山

弘徳寺由緒

『弘徳寺略縁起』によると、当山開基は信楽房といい、平将門の子孫であり、その俗名を相馬太郎義清といった。聖人が常陸国稲田に留錫していたとき門弟となり「信楽」の法名を賜わった。

寺伝によると、この地は、かつて聖徳太子の発願により秦河勝が地蔵菩薩の像を安置するために建立した堂宇があったようだ。親鸞聖人がこの地に巡錫になった際に、その宿縁を喜ばれ、草庵を結び布教したようである。聖人は鎌倉や国府津にしばしば滞在していたことから、この地から近い国分寺(海老名市)や法然門下では聖人の兄弟子であった隆寛の遺跡(飯山 光福寺)を訪ねたことが、この地と聖人を結びつける所以であると考えられる。

当寺の什物に地蔵菩薩像が現存している。浄土真宗の寺院で地蔵菩薩像を安置するのは希だが、このことは弘徳寺の前身が太子堂か地蔵堂であったとも考えられている。そういう場所で聖人は民衆を集め、教化をしていたのだろう。

後に、この草庵を親鸞聖人は信楽房に託し、「弘徳寺」と称するようになったと伝えている。

善鸞(親鸞聖人の子)の墓

また、当寺には善鸞の墓がある。善鸞は真宗の宗義を乱し聖人に勘当されるが、信楽房もまた、聖人の教えに異義を抱き、他の門室に移ったようであり、さらに善鸞に加担していたとも考えられている。

善鸞はその後、安住する地もなく、晩年に近づいてからは聖人の旧跡を慕い、当寺に専ら逗留し、そのまま弘安元年(1278)に亡くなった。



弘徳寺 親鸞聖人坐像



袈裟掛けの松の切り株

信楽房は、寺伝によると京都へ上り、親鸞聖人との面謁を許され、さらに聖人から後を託され、聖人88歳の寿像を授かったという。また、聖人入滅後には如信上人より、聖人の遺骨を頂き、聖人像の胎内に納め、尊拝したと伝えている。

袈裟掛けの松

親鸞聖人がこの地に植えられた松があり、この松の葉が一葉だったので「一葉の松」と呼ばれ、飯山七不思議の伝説となっている。聖人が再度訪れた時に、この松に袈裟を掛けたことから「袈裟掛けの松」と呼ばれるようになった。松は昭和30年代に枯れてしまったため、現在はその切株のみを残している。